
FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーオブモンスター》～

天翔る墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 〈妖精の化物〉
フェアリーオブモンスター

【Nコード】

N4563Z

【作者名】

天翔る堕天使

【あらすじ】

ある日、俺は大学から帰ってきて直ぐに昼寝をしていたはずだった。目が覚めたらそこには神様が座っていた。神様のミスで死んでしまったために、俺は他の世界に転生してそこそこ暴れます。

※作者はかなりの初心者です。

駄文や、少ない戦闘描写は多めに見て下さい。

ゝ プロローグ的な 」（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。（キリッ？

今回が始めての投稿になるので、暖かく見守ってください。（＜

＞

では、どうぞよろしくお願いします。

く プロローグ的な く

目を覚ますとそこは白をモチーフにした落ち着いた感じの部屋だった。

俺

「見覚えのない天井だ。」

よし、間違えたからもう1回言い直すか。

俺

「見覚えのない天井だ。」

さて、こういう場面にはこんな感じのお約束がある筈だ。

確か俺は、大学から普通に帰って来てすぐに睡眠をとっていたのに、何故か起きたらこの部屋にいた。

少し警戒しながら辺りを見回すと、色々な家具が数点、観葉植物が2つ、そしていかにも神様のような感じがする、白いローブを着た男の子が1人椅子に座っている。

俺

「どゆこと?。」

神様

「気がついたかな？　ちなみに僕は神様だよ。よろしくね、お兄さん！」

俺

「よろしく。」

神様

「お兄さんって、かなり落ち着いてるよね。普通なら、軽くパニツクはおこるよ？」

俺

「残念ながら俺はそういう小説とかを読んでたから？　？　？　？　？
ん？　そういえば神様、俺が死んだ覚えが無いんだが。」

神様

「はい、それは僕がゝ誤つてジュースを溢こぼしてゝ濡らしちゃったからゝそれを乾かす為に、ストーブに近付けたらゝ灰にしちゃったんだゝ。」

「たぶん、そのせいで気がつく前に、死んじゃったのかな。」

「だから、謝罪と一緒にどこか好きな所に転生させようと思うて呼んだんだよ。」

俺

Oh?
?
?
?
?

つまり俺は今、目の前に座っている子のおっちょこちよいな、神様ドジッ
のミスで死んだらしい？　？　？　？　？　？

俺

「じゃあ早速で悪いけど、『FAIRY TAIL』によろしく。
能力とかはどうすればいい？」

神様

「うゝん、そうだな？？？能力は5個とゝ特殊アイテム1個にしようかなゝ」

5個か？？？？何にしようか？？？特殊アイテムもどうするかな？？？？。

ゝゝゝゝ5分後ゝゝゝゝ

俺

「決まったから言うぞ」

神様

「いゝよゝ」

俺

「1個目は、『とある魔術の禁書目録』^{インデックス}に出てくる、一方通行のベクトル操作能力が使用可能。

2個目は、『ONE PIECE』に出てくる、覇王色、武装色、見聞色、の3種類の覇気が使用可能。

3個目は、海外ゲームの『Prototype』にでてくる、アレックス・マーサーの全能力MAX状態。

4個目は、1万年に1歳^{さい}だけ歳^{とし}をとり、^{なおか}尚且つ29歳になると老けなくなる。

5個目は、丈夫な身体」

特殊アイテムは、【死んで無い限りならどんな病^{やまい}でも治せる薬】で、形はなるべく簡単に運べる位の大きさ。」

神様

「ッーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」

神様

「あっ」

）俺SideOut（

ゝ プロローグ的な ゝ (後書き)

如何でしたか？ ((((; 。 ▽))))

かなり心配ですが、読者様の感想や、厳しい指摘を待っております。

次回は主人公の詳しい能力を書いています。

ではまた会う日まで (((▽ 、) ノシ

B Y天翔る堕天使より。

主人公の説明や、細かい能力の説明（前書き）

どうも、天翔る堕天使です（キリッ！

今回はオリ主の能力説明なんですが、かなり長いのでザツクリと軽く見て下さい。

ではどうぞ（ ・ ▽ ・ ）ノ

主人公の説明や、細かい能力の説明

名前 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? アレックス ? マーサー

※次回からは、『俺』から『アレックス』と書き換えます。

性別 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 男性

一人称 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 俺

容姿

【服装】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 革ジャン〔黒〕＋フ

ード付きジャンパー〔茶〕＋襟付きの長袖シャツ〔白〕＋ジーパン

〔青〕＋革靴〔黒〕

【目】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 青色

【髪】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 茶色

【身長】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 180センチ

【体重】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 80キロ

【年齢】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 22歳

備考

・身長と体重は、自分の現在の状況。(笑)

・年齢は原作に合わせる為に、減らしました。

~~~~~1個目の能力説明~~~~~  
アクセラレーター

一方通行のベクトル操作能力。

運動量・熱量・光・電気量etcといった、ありとあらゆるベクトル(向き)を観測し、触れただけで変換する能力。

普段は『反射(ベクトルの反転)』に設定されており、身体の間

おお 囿を覆うわずかな保護膜に触れた全ての攻撃を、自動的に跳ね返してしまおう。

保護膜に接してさえいれば密着していなくともベクトル操作が可能であり、『膜に接触している』巨大な物体として、暴風操作や自転の操作を行うことすら可能である。

受動的な『反射』だけではなく能動的な能力としても優秀で、血  
流逆転・体内電流操作による心臓麻痺や洗脳、鉄柱飛ばし・身体  
運動増幅・風向操作によるM7クラスの  
暴風、竜巻、飛行・高電離気体・再生促進・自転操作・レールガ  
ン以上の速度の石礫？？？？？など戦闘方面に限  
らず多岐にわたる応用が可能。

感知能力でもあるため、低周波や放射線など五感で認識できないベクトルも観測できるし、変換できる。

反射といっても万物を拒絶しているわけではなく、物理法則に従って有害と無害のフィルタを無意識のうちに構築し、生活に必要なもの（必要最低限の酸素や重力等）は反射しないようにして、『それ以外の全てのベクトル』を反射するように設定されている。

自分の意思次第で、有害な音なども反射可能。そのため未知の力であっても『それ以外のベクトル』と認識して反射可能である。

2個目の能力説明

『ONE PIECE』に出てくる、覇王色、武装色、見聞色、の3種類の覇気。

「見えない鎧を着るようなイメージ」を持ち、より固い鎧は必然的に攻撃力にも転じる」

実際に攻撃力にも転じる

実体が無いものに対して、攻撃ができる。この「武装色」の覇気がこの世で唯一の対抗手段であるということ。

この力は武器に伝わせることもできる。

3個目の能力説明の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態。

12

変装を解いてアレックス本来の姿に戻る。

? ? ? デイスガイス DISGUISE (変装)へんそう

あなたが接触した人誰でも吸収し変装出来る能力です。

吸収する事によりその人物の特殊技能、知識、及び外見へのアクセス能力をアレックスに与えます。

デイスガイス 【DISGUISE】

■ コンスーム CONSUME パワー POWER

捕食能力

■ コンスーム CONSUME ブースト BOOST

捕食時の体力回復量が増加する。

■ ステルス STEALTH コンスーム CONSUME

「ステルスしながら」

目標が声を上げる前に、速やかに捕食する。

発動するためには、捕食対象を含む周囲のすべてが、アレックスのことを視認していない状態でなければならない。

■ デイスガイス DISGUISE パワー POWER

変装能力

ぼうぎょけい  
防御系

? ? ? アーモードフォーム ARMORED FORM (装甲形態)そうこうけいたい

バイオマスを身体表面に噴出させ、強固な防弾能力を発揮します。

鎧兜の様なこのフォームで体を覆えば、

眼前の敵を粉碎し、最も強力な攻撃でさえ無効にする、止める事の出来ない力を得られます。

■ アーモードフォーム ARMORED FORM

全身を装甲で覆うことにより、全方向からのダメージを軽減し、ダッシュ時に敵や車両を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

発動中は移動速度が低下し、グライドGLIDEが使用不可能になる。

? ? ? シールドSHIELD (盾)たて

左腕をバイオマスで形成された骨状のシールドに変える事ができる。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

■ シールドパワーSHIELDPOWER

前面に盾を形成し、前面からの攻撃を大きく減衰するほか、ダッシュ時に敵を吹き飛ばし、ダメージを与えることができる。

防御力はArmoredFormより高い。

発動中にGlideを使うことが出来るため、Combatスキルの奥義Bullet Diveを活用できる。

移動速度の低下も発生しないため、機動戦に向いている。

こうげきけい攻撃系

? ? ? ブレイズBLADES (刃)やいば

右腕を一度で5、6人の敵を切る事が出来る骨状のブレードに変える事により、敵を真つ二つに切断する事が出来ます。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

■ ブレードBLADE エアAIR スライスSLICE

ブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。 下方  
向への追尾性能は高い。

■ ブレードBLADE フレンジーFRENZY

走りながら左右にブレードを振り回す。 追尾性能はそれほど高くない。

？ ？ ？ クローズ CLAWS（鉤爪）かぎづめ

アレックスの手は相手に致命傷を負わせる事の出来る骨状の鉤爪へと変わり、変形後の彼は即死を与える殺人マシンと化します。

■ クローズ CLAWS パワー POWER

攻撃力は並だが、振りが素早く、少数の人型敵と戦うのに向いているが、

グランド スパイク GROUNDSPIKE以外に目立った対装甲能力を持っていないのが欠点。

■ グランド GROUNDSPIKE スパイク

地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。

また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能。

■ ダンシング スライス DASHINGSLICE

「ダッシュ中」

地面を滑るように移動し、爪で一発だけ薙ぎ払う。 攻撃力はそこそこだが、非常に高い追尾性能を持ったため、

敵と交差するように使うと、敵の背面まで回って斬りつけるような機動を取る。

？ ？ ？ ハンマーフィスト HAMMERFIST（鉄槌拳）てつたいけん

数百ポンドものバイオマスの塊を両方の拳に移行させる事により、鋼や人骨すらも粉々に破壊する巨大なハンマーへと変わります。

■ ハンマーフィスト POWER HAMMERFISTPOWER



攻撃力は高く、攻撃速度はかなり遅めだが、極一部の攻撃以外は範囲攻撃能力を持っており、振り回してるだけで周囲の物を吹き飛ばしまくる。

ノーマルアタックによるコンボは、3段階目の打ち上げ以外は全て範囲攻撃。

■ ハンマーフィスト HAMMERFIST スモークダウン SMACKDOWN  
大きく力を貯めて、地面に向かってハンマーを叩き付ける。

ダメージは見た目ほど強くはないが、非常に広い攻撃範囲を持っため、

周囲を囲まれた状態で威力を発揮する。

■ ハンマーフィスト HAMMERFIST エルボースラム ELBOWSLAM  
「ジャンプ中」

下方の敵に向かって飛び込み、強烈な肘打ちを繰り返す。  
ダメージはそこそこといった感じだが、追尾性能と攻撃範囲はかなりの強力。

■ ハンマートス HAMMERTOSS  
「ダッシュ中」

ハンマーを突きだしたまま、走行中の勢いを利用して敵に飛びかかる。

ハンマーは敵の懐に入れないと真価を発揮できないため、敵集団に突撃を掛ける時には有効に働く。

? ? ? マッスルマッス MUSCLEMASS (筋力増強) きんりよくぞうきょう

アレックスの腕の筋力を増強させ、両腕の力の焦点を合わせる事で敵により大きなダメージを与えられます。

■ マッスルマッス MUSCLEMASS パワー POWER  
素手状態の攻撃ダメージを強化。

戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

■ マッスルマス MUSCLE MASS スロー THROW  
Muscle Mass 発動中は、投擲によるダメージと投擲射程を強化する。

? ? ? ウィップ WHIPFIST むちうで (鞭の腕)  
素早く襲いかかる事が出来る非常にシャープな鞭は敵を半分に切り裂き、離れた場所にいる敵を引っ張ります。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」  
■ ウィップ WHIPFIST フイストパワー POWER  
横方向への範囲攻撃と、奥行きに対する長射程攻撃に関してはまさにエキスパート。

非力そうな印象とは裏腹に、十分な攻撃力を備えており、驚くほどの射程もある。  
そして威力も高めなので、離れた場所にいる敵に対して有効。

■ ストリート STREET スワイパ SWEEPER  
横方向に大きく腕を振るうことで、周囲の敵を両断する。

これまた、技の印象とは裏腹に威力が高く、敵を一掃するほどの破壊力を持つ。

■ ロングショット LONGSHOT グラフ GRAB  
腕を伸ばし、遠方の目標を掴む。

軽い目標は引き寄せ、重目標は自分がある場まで飛んでいく。

しかくかんちがい  
視覚感知系

? ? ? サーモ THERMAL ビジョン VISION ねっげんしかく (熱源視覚)

サーマルビジョンは、あなたの視界が狭くなるリスクと引き換えに、煙で覆い隠された場所や障害物が有る場所での見通しをよく

する事が出来ます。

■ サーモビジョン THERMAL VISION パワー POWER  
煙幕効果を遮断したり、感染者を見分けやすくする。

? ? ? インフアクティッド INFECTED VISION かんせんしゃしかく (感染者視覚)

あなたの視覚を変更して、潜行性の感染症が人々に忍び寄るのを検出して下さい。そうする事で、激しい感染を標識の様に際立たせ、ウイルスに汚染された目標を明らかにする事が出来ます。

「今回は、ご都合主義で『ウイルス』 Ⅱ 『風邪とかのウイルス』 ということで、ご理解して下さい。」

~~~~~ 『特殊能力』 ~~~~~

【ムーブメント MOVEMENT】

O エア AIRUPGRADES アップグレード

■ エアダッシュ AIRDASH

「ダッシュ（空中）」

空中で大きく加速する。 加速度が非常に高いため、Glideと組み合わせると、地上を走るより速く移動できる。

エア AIRDASH ダッシュダブル DOUBLE

Doubleで二回までダッシュ可能になる。

■ エア AIRDASH ダッシュダブル DOUBLE ブースト BOOST

「ジャンプ+ダッシュ」

をすると、上方向に向かって大きく飛び上がる。

■ グライド GLIDE

「ダッシュ+ジャンプ（空中で）」

両手を広げて滑空状態になることで、より長時間滞空することが出来る。

グライドは空中にいる間は何度でも発動できるため、「エアダッシュ↓グライド↓エアダッシュ↓グライド」

をやることで、ほとんど高度を落とすことなく高速移動をすることが出来る。ただし、飛翔ではなく滑空のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

■ エアリカバリー
AIRRECOVERY

「ジャンプ（吹き飛ばされ中に）」

吹き飛ばされた際に身を捻り、素早く通常状態に復帰できる。被迎撃後にダッシュやグライドを使って回避運動を取れるため、文字通り、態勢を立て直すのに有用。

○ スプリント アップグレード
SPRINTUPGRADES
■ ドライブロール
DIVEROLL

「ダッシュ（移動中に）」

前転。通常状態で出したい時はダッシュ後すぐ離すと出る。だがこのスキルの真髄は、様々な攻撃をキャンセルできる点だろう。立ち通常はほぼ全てのフォームでキャンセル可能なので敵が振りかぶったのを見てから回避運動が出来るようになる。

■ スプリント スピード
SPRINTSPEED
地上での走行速度が強化される。

○ ジャンプ アップグレード
JUMPUPGRADES
■ ジャンプ
JUMPUPGRADE

チャージジャンプによる飛距離が伸びる。

ジャンプ高度が上がる⇨グライドで長時間飛行できる⇨より高速で

移動できる、ということ。

■ ウォール WALL JUMP LATCH

「ジャンプ（壁際で）」

壁を使った三角飛びを、何度でも使用できるようにする。

【サバイバルティール SURVIVABILITY】

○ クリティカル CRITICAL MASS マスアップ UPGRADES グレード 《

■ アドレナリン ADRENALINE SURGE サージ

アレックスが死亡寸前まで追い詰められると発動する。アレックスは短時間の間、完全な無敵状態となる。

○ ヘルス HEALTH アップグレード UPGRADE

▲ ヘルス HEALTH BOOST ブースト

自動回復能力…小く中

▲ HEALTH 《ヘルス》 BOOST ブースト 2

自動回復能力…中く大

○ ヘルス HEALTH リジェネーション REGENERATION

■ リジェネーション REGENERATE BOOST ブースト

アレックスの体力が一定値以下を切ったとき、体力が自動的に回復するようになる。Boostを重ねていくことで、自動回復可能な体力上限値が高まっていく。

■ リジェネーション REGENERATE Delay ドレイ

ダメージを受けてから、自動回復が始まるまでの時間を短縮する。

【コンバート COMBAT】

○ エア AIR

■ フライングキック
FLYING KICK BOOST ブースト

Flying Kickによる射程と威力を強化する。Flying Kickは全編通して利用することになるため取得は必須。

■ フリップ キック ランチャー
FLIP KICK LAUNCHER「Flying Kickがヒット中」

Flying Kickがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを与えると共に、軽量の目標を吹き飛ばすことが出来る。

単純に、Flying Kickを強化できるスキルと考えれば、取らない理由はない。

■ フライング エルボー ドロップ
FLYING ELBOW DROP

「壁走り中」

下方方向に向かって、肘を突き出したまま落ちる。

■ ボディサーフ
BODY SURF

「人間限定」

Flying Kickの勢いを利用し、飛びかかった相手に乗って移動する。早い話、Flying Kickを当てた相手の、前方にいる敵を巻き込むスキル。

移動距離はちょっと短く、巻き込むことが出来る敵はそんなに多くない。

■ エアスタンプ
AIR STOMP

「空中で」

直下に向かって急降下し、衝撃波を発生させる。キックと違い、全く追尾無しで直下に降りるため、

もっぱら、攻撃目的よりは急降下するための手段として利用することが多い。

■ キャノンボール
CANNONBALL

「空中で」

空中で高速回転しながら、対象に向かって突撃し、対象と周囲の物体を破壊する。

また、対象の間にある軽目標は弾き飛ばしながら移動する。

高威力・範囲効果に加え、貫通効果までついたFlyingkickの上位互換。Flyingkickの後に続けて出すことも可能
なため、空中二段攻撃が可能になる。

■ ブレット
ダイブドロップ
BULLETDIVEDROP

「Glide中に」

直下に向かって急降下し、非常に広い範囲に渡って衝撃波を発生させ、高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増す。

MuscleMass発動中なら、さらに威力と攻撃範囲が増す。

■ スパイクドライバー
SPIKEDRIVER

両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける。 アッパー↓エア
コンボの後にしか発動できない特殊なスキル。

○ エアエフェクト
グラウンドサター
AREAEFFECT
GROUNDSHATTER

地面を思いっきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす。

■ グラウンド
サタードロップ
GROUNDSHATTERDROP

「空中で」

GroundShatterの空中版。

高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増加する。やや緩やか
ではあるが、下方に向かって加速する性質がある。

GroundShatterより打ち上げる力が強く、大きな相手

の姿勢を崩すほどの衝撃を発生させる。

■ ナックル KNUCKLESHOCKWAVE

「グラブ」

拳を打ち鳴らして衝撃波を起こし、周囲の対象を弾き飛ばす。

■ グラウンドスパイク GROUNDSPIKEGRAVEYARDDEVIATOR
レイビヤ
OR

地面から巨大な棘を何本も突き出し、あらゆるものに致命的なダメージを与える。かなり広い攻撃範囲と、極めて高い攻撃能力を持つ大技。

■ テンドウロー TENDRILBARRAGEDEVASTATOR
ブラージ
ダフステイラ

全身から触手状の体細胞を幾重にも突き出すことで、周囲の目標を串刺しにする。あらゆるスキルの中でも最も広い攻撃範囲を持ち、攻撃力も非常に高い。

威力はGroundspike Graveyard Devastatorには劣る。

o グラアッポ GRAPPLE
グラアッポ
■ GRAPPLE SLAM
スラム

「人型の敵をグラブ中に」

掴んだ人型の敵を地面に向かって叩き付け、衝撃波を発生させる。POWER BOMBと同様の対人専用スキルのため、オーバーキルの傾向が強くて使い道に困る。

■ パワーボム POWER BOMB

「スペシャル（人型の敵をグラブ中に空中で）」

敵を引っ掴み、地面に向かって急降下して地面に叩き付ける。範囲攻撃能力のある投擲技の一種。


~~~~~4個目と5個目の能力説明~~~~~  
そのままの意味です。

~~~~~特殊アイテム~~~~~

【大きさ】？？？？？『○i○k○』程の大きさ

【内容量】？？？？？20粒

【オマケ機能】？？？？？1ヶ月おきに、自動で補充される。ただし、20粒以上は増えない。

【入れ物】？？？？？『○i○k○』の入れ物

主人公の説明や、細かい能力の説明（後書き）

どうでしたか？（（（（；。D。））））

自分のユーザーページに、逆お気に入りか2人もいたのでうれしいです。（へーへ）

次回は本編に進む前のお話です。上手く書けるか分かりませんが、頑張ります。

ゞ（@）ー（@）ノ

ではまた、次回にお会いしましょう。

b y天翔る堕天使より。

第000. 1話 その後（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

3回目がやっと書き終わりました。

ゝ(@)ー(@)ノ

? ? ? ? ? ? ? ? 何を言えいいのか分かり

ませんので、始まります。

第000. 1話 その後

Side 神

「あ、どうしよ座標少しずれちゃったけど大丈夫かな?」
「??」

「神様、よろしいでしょうか。」

神様

「ん?どったの秘書さん?」

秘書

「はい、先程の人物に渡した内容で最初に叶えた能力に少々ながら不備がありました。」

こちらがその不備のあった詳しい内容です。」つ紙

神様

「はい」

秘書

「それと、転生した先の時間が決まっていなかったので、原作突入の7年前しておきましたが悪かったでしょうか?」

神様

「いゝよ。じゃあこの事あの人に送ってといてね。」

秘書

「わかりました。」ペコリ

こうして神様の心配事も無くなって(?)、いつもの仕事を始めました。

秘書さんは手紙を転送して、こちらにもいつものように仕事を始めました。

Side Out

Side アレックス

気が付くと穴の中を落ちていた。

清々しい程の笑顔で送られて来たが、ほぼ垂直に落ちてるからメチャメチャ速い。そして最後に神様の口から聞いた、

神様

(「あ」)

が未だに気になっている。

そうしている内に、足下が少し明るくなってきた。俺は、恐る恐る下を見ると出口なのか綺麗な雲1つ無い青い空が見える。

アレックス

「はあ？　？　？　？　？　？　空？　？　？」

そこを抜けると遙か上空だった。

思考が一旦停止したのは言うまでもないし、しょうがないと思う。例えば言うのと、『パラシュート無しでスカイダイビング』みたいな感じ。

アレックス

「くそおーーーーーまだ落ちるのかよーーーー！」

少しの思考ですぐ出てきた言葉をだす。

アレックス

グライド
「GLIDE！」

その瞬間、両手を広げる事によって滑空状態になり、より長時間滞空することが出来る技だ。

アレックス

「危ねえー？？？これでもまだましだな。だけど空を飛ぶ為の能力が使えなかったら間違いなく危険だったな？？？」

安心感に浸っていると、またスピード上がっていき斜め下に落ちていく。この技は『飛翔』ではなく『滑空』のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

だいぶ離れた所に落とされたく、いくつかの町や村が森の奥にチラチラ見えたが、どれがマグノリアなのか分からなかった。

けれど、自分が貰った能力の確認をしたいため、近場の森の湖の近くに降りる事にした。

湖に向かいながら、アレックスは「自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下」をやること

で、

地上から約40m上空から地面に飛び降りた。この位の高さなら平気らしい。そして、アレックスは目の前の湖を覗いてみるとその姿は？　？　？　？　？　？

アレックス

「完璧にアレックス？　マーサーだな？　？　？　？　？　？　少し幼い感じだけど。」

その姿は、『Prototype』にでてくる、アレックス・マーサーだった。しかし、なぜ自分が幼くなっているのだろうと思っていたらさきに、神様から貰った携帯電話の着信音が鳴った。

確認しようとポケットに手を入れながら近くの切り株に座ると、新着メールが2件届いていたので先に古い方を読んでもみると？　？

？　？　？　？

アレックス

「はあっ？」

～～内容～～

これを見てるって事は～空からのダイブは～無事に着いたって事だなね～。

あとね～落とす場所と～時間がずれちゃってね～今原作よりも7年前になったんだ～。ごめんね～。

それと～能力の確認したら～色々と移せてないのが～あったらしい

から、詳しい事はメールが届くのを待っててね、

b y 神様より

アレックス

「？ ？ ？ ？ ？ ？」

「神様はおっちょこちよいw w w w」ポチポチポチポチ

「よしっ、保存完了！」

そんな感じで1つ目のメールは受け流し、もう1つのメールにはさつきよりも解りやすく書かれていたが、内容が酷かった。

アレックス

「oh ？ ？ ？ ？ ？」

、、内容、、

こんにちは、神様のサポートをする秘書です。単刀直入に言うと、最初に叶えた能力の一部が不具合により使用できません。

、以下の能力が完全に使用できません、

？ ベクトル操作による、自動反射能力

？ ベクトル操作による、自分の身体能力の向上

、以下の能力は条件付きで使用できます、

？ 黒い羽の使用 ※ 使用回数は1日5回が限度。使用時

間は10分。鍛えれば伸びますが時間と経験、感覚が必要。

？ ベクトル操作での反射能力 ※ 自動では無いが反射はできる。

（以下の能力は支障が無く使用ができます）

？ 演算能力

？ 運動量・熱量・光・電気量etcといった全てのベクトルを、触れただけで観測、変換する能力。

？ ベクトルの操作で周囲の感知能力

？ ベクトルの操作で風を操り暴風操作

？ 逆算能力

これらが、貴方に渡した能力におきた不具合と使える能力です。こちらも謝罪といった形で、何かしかなかったので5個目の内容を勝手に変えました。

『丈夫な身体』↓『とある魔術の禁書目録にでてくる、聖人と同じ身体』

それと、特殊アイテムは1ヶ月おきに補充されますが、20個以上にはならないようにしてあります。使い方に気をつけて下さい

。では、よい第2の人生を楽しんで下さい。

秘書より

P S この文章は見終わると自動的に破壊されます。

俺は最後の文章を見て、慌てて携帯電話を投げ捨てる。

それと同時に、音を立てて携帯電話は原型をとどめることなく、壊れていき最後は潰れて無くなった。

アレックス

「『Prototype』の能力は大丈夫かな？さっきGLIDE
はできたけど？？？？？」

俺はそこで思考切り替えて、能力確認をする事にした。もし何かの手違いで『Prototype』の能力がアップグレードしないとだめならば、完全に死ぬ。というかやばい。
俺は焦りながらも近くの木に向かって技をだした。

アレックス

「GR^{グラウンド}OUN^{スパイク}DSP^{スライス}IKE！」ドンッ！ズガガガッ！バシユッ！

ザクザクザクザク！

「ジャンプしてからのBL^{ブレード}AD^{エア}EAIRSL^{スライス}ICE！」ダンッ！ヒュン！ゴオオオオオッ！ザンッ！

アレックスの出した技は地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能な能力だ。

2発目に出した技は、空中でブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。下方向への追尾性能はかなり高い。

そのため、目の前に有った木は地面から出た棘によってボロボロの穴だらけになり縦に割れた。

力』と言う名の『狩り』を始める。
勿論、決めゼリフは？　？　？　？　？

アレックス

「さア、スクラップの時間だ！」

Side Out アレックス

第000. 1話 その後（後書き）

いかがでしたか？

今回は戦闘シーンが有りませんでした。技を出す時の擬音が微妙でした。（^| ^;）

そろそろクリスマスの時期ですが、風邪を引かないようにして下さい。（>人<）

それでは、皆さんまた次回！

b y天翔る堕天使より。

第000. 2話 ギルドへの勧誘(前書き)

どうも、天翔る堕天使です。
なんと初の連続投稿！

勢いに乗っていると楽しいです。

ゞ(@)ー(@)ノ

では、どうぞ！

第000. 2話 ギルドへの勧誘

俺がフェアリーテイルの世界に来てから2年がたった。現在は原作開始5年前となる。つまりナツがルーシィに会うまでが少しずつ近づいて来た。

ちなみに俺はライオン(?)の様な動物を捕食した後、湖の近くにあった荒れた町の中にログハウスを造って生活をしている。

大きさは1階建ての1LDKのバス、トイレ付きだ。

なんと、ここら辺の町はあの変な動物達が暴れて被害に有^{へん}っていたらしい。しかもあの変な2匹がボスという始末だった。

アレックス

「だいぶ時間がたったなあ ? ? ? ? 能力も十分に使えるようになったしこの町も平和になったな ? ? ? ? ?
んっ?」

俺はこの2年間で、町から半径4〜5kmに生息していた危険な猛獣十別の意味で危険な猛獣を追っ払った。

建物は一部が破損している所も有ったが、町の人達に『猛獣を追っ払った』と話したら皆、泣いて喜んだ。

そして話が飛ぶか、覇王色の覇気は半径200mまでなら威圧ができるようになったが、まだまだ伸びそうだ。見聞色の覇気と武装色の覇気は最初から完璧に使えて、見聞色の覇気での『気配の感知』が2?まで観^みえるようになった。

それに、ベクトル操作の感知能力を合わせると3?まで伸びるよう

になり、かなり鮮明に観^みえるようになった。

そして今、その感知能力^{センサー}には見覚えは無いが原作に出てたあのマスターと、紅い髪の女の子が俺の自宅に向かってやって来た。

アレックス

「やっと来たか？　？　？　待ちわびたよ。」

距離にして200mをきったところだ。ちょっとイタズラで、覇王色の覇気を軽く1回だけ当ててみる事にした。

Side Out　アレックス

Side　？　？　？

覇気を当てられる少し前

？　？　？　？　？　1

「この町にいるんですか、マスター？」　ワクワク！！
？　？　？　？　？　2

「ああ、この先に建っているログハウスに住んでおるようじゃ？
？　？　気になるのか、エルザ？」

最初にマスターが？　？　？　？　いやマスター？　マカロフは一緒に来たエルザという紅い髪の子と道案内をされながら少し話をしていた。

エルザ

「はい！なんといってもこの辺りの危険生物を、1人で全部倒したり山に返したりしたと聞きました。

かなりの腕の立つ人物に違いありません！」ワクワク！！

マカロフ

「うむ。確かにこの辺りの危険生物はそれこそ『Sランク』の依頼ほど危険では無いんじゃが『Aランク』の依頼にしては、ちと荷が重いからの。」

しかも、この辺りの危険生物をたった1人でとなるとかなりの魔導士じゃろう？　？　？　？　一体どんな奴なんじゃい？」

マカロフは、道案内をしてきている男性に聞いてみた。

男性

「最初、僕達はかなり変わった人だと思いましたよ。5年前にこの町にあの変な猛獣を1人で倒しただなんて誰も信じないから、僕を含めた皆が口を揃えて言いましたよ、『じゃあこの辺りの危険生物を全部退治してくれ！！』ってね。

そしたら、ものの5日で退治したんだからびっくりしましたよ。

ましてや急に、『俺は魔法が使えないから建物が直せません。だから皆で町を直しまし^{みんな}よう。』だなんて言い出したんですよ。」

マカロフ&エルザ

「魔法が使えない？」

男性

「はい。皆が『どうやって倒したの？』って聞いたらあの人は、『威圧した』って言うから皆びっくりしましたよ。」

「あつ、この道の突き当たりがアレックスさんの自宅です。」

そう言うと、男性が指を差した少し狭い1本道の先にまだ新しい感じの家があった。

男性

「では、自分はここで」ペコリ

マカロフ

「ああ。有りがと」スッ

エルザ

「有難うございました。」ペコリ

マカロフ&エルザ

「「？　？　？　？　？」」

エルザ

「マスター、魔法を使わずに『威圧』で倒したと聞くと何故か怖く感じるのですが。」

マカロフ

「うむ。どうやら気を引き締めて行こうかの。」

そういつて2人はアレックスの自宅に近づいた瞬間、先程の男性が言ったアレックスの『威圧』が2人に当たった。

て来た。

マカロフ

「初めまして、わしはフェアリーテイルのマスターをしている、マカロフじゃ。そしてこっちがエルザじゃ。」ペコリ

エルザ

「宜しく。」ペコリ

アレックス

「こちらこそ宜しくお願いします。マスター？ マカロフそれにエルザさん。」スッ

（まさかここでエルザにも合うなんて思わなかったな。）

「申し遅れましたが、俺の名前はアレックス？ マーサー。アレックスと呼んでください」

マカロフ

「アレックスか？？？ おぬしはここで何をしてるんじゃない？」

アレックス

「普通に生活してます？？？ 最近は猛獣も出て来なくなり平和になりましたから。」

マカロフ

「ふむ？？？？？ ここには獰猛なA級の怪物ばかりが住み着く森なんじゃったんだが？？？？？ ここ最近でこの森に生息していた危険な猛獣がいなくなったんじゃない。」

「それで気になって来たんじゃないが？？？？？ お主の仕業かの？」

アレックス

「流石ですねマスター？ マカロフ、確かに俺が退治しました。勿論聞いたと思いますが『魔法は使ってない』と言うのは事実です。」

と言うと、マカロフとエルザが驚く

マカロフ

「ふむ？　？　？　実力も申し分ない？　？　？　なら大丈夫かの？　？　？　どうかの？」

エルザ

「私も賛成です、マスター。」

アレックス

「？　？　？　？　？　？」

マカロフ

「おぬし、わしのギルドに入らんかの？」

俺はこれを見ていたと言っているほど、嬉しい申し出だ。

アレックス

「喜んで。」ニコッ

Side Out アレックス

第000. 2話 ギルドへの勧誘（後書き）

いかがでしたか？

登場人物の口調に、違和感があればぜひコメント下さい。

では、また次回！

b y天翔る堕天使より。

PS 〓アレックスはハーレムは基本的にはありません。一途な男なので？？？？ 12月21日までに『活動報告』へ詳しく書きます。

第000. 3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回はアレックスが、ギルドに入ってナツと力比べをする話です。

なんと、活動報告についてコメントが書き込まれました。ゞ（@

ー（@）ノ

ありがとうございました。

それでは、どうぞ！

第000. 3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ

Side アレックス

アレックス

「じゃあ町の方はよろしくお願いします。もしまた猛獣が出たら、直ぐに駆けつけますから。」

「町の管理や治安も、頼みましたよ皆さん。」

アレックスは町の人達にこの町からでて『マグノリア』にあるギルドに入る事を町の長に伝え、町の人達にも話した。

勿論誰も止めなかった。何せ彼はこの町の恩人でもあったので、これで、自由にさせてあげようという話しが前から出ていたのだ。

アレックス

「皆さん、行ってきます。」

こうしてアレックスは、マカロフとエルザが待っている駅に向かって行った。

Side Out アレックス

Side マカロフ&エルザ

マカロフ

「それにしても、あの青年はちと気になるの。エルザ、お主はどうじゃ？」

エルザ

「マスターもですか？ 実は私もなんです。何故かあの男からは『魔力』ではない『別の力』が強く感じられます。」

マカロフとエルザは駅のホームにアレックスが来るまでの暇潰しに、2人はアレックスについて話していた。

マカロフ

「うむ、ワシも彼の『力』が見たことがないから、どれ程の強さか知りたいの。」

エルザ

「・・・マスターも知らない『力』となると・・・一体なんでしょう・・・あつ、来ましたよ。」

そんな話をしていると、人混みの中ならアレックスが見えた。その後3人は列車に乗り、『マグノリア』へと向かっている。

勿論、さっきの2人が話していた内容は全部アレックスの耳に聞こえていたのは言うまでもない。

Side Out マカロフ&エルザ

Side ギルド内

マカロフ達が駅からおりて『マグノリア』にあるギルド、フェアリーテイルに向かっていとギルド内では………

??? 1

「オイ、クソ炎やんのか、あぁん？」ゴゴゴゴゴ!!
??? 2

「上等じゃねえか、氷野郎。かかって来い!!」ゴゴゴゴツ!!

??? 3

「なんだあ? またグレイとナツが喧嘩してんのか……
いつもなら、エルザが止めにはいるのに見当たらねえな。リサーナ、知らないか?」

リサーナ

「確か、今朝からマスターと一緒に『山のふもとにある町に用がある』っていったよミラ姉。」

ハッピー

「あいっ!!」

最初に喧嘩をしていた2人は言うまでも無く、『グレイ・フルバスター』と『ナツ・ドラグニル』、相変わらず中の悪い2人組だ。つぎに『ミラジェーン』、エルザを気にしている……

ミラ

「なあゝんだ。てっきりどっかに隠れてるかと思ったぜ。あっはっはっはっ!」(笑)

「……そうでもなかった。彼女はエルザと仲が悪く、まさに『犬猿の仲』ともいえる程の、仲の悪さだった。

リサーナ

「もう、ミラ姉ったら。

あっ、ちょうど帰って来たよ。マスター、エルザおかえり。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

Side Out ギルド内

Side アレックス

アレックス

「ここがギルドですか、なかなかいい所ですねマスター・マカロフ。

マカロフ

「そうかい？ありがとな。それと呼び方は何でもいいんじゃないが、そ

の呼び方じゃと何か、よそよそしい感じが……」
アレックス

「申し訳ない、では『マスター』でいいですか？」

マカロフ

「うむ、お主はこれからワシらの家族じゃから好きに呼ぶがよい。」
リサーナ

「マスター、エルザがおかえり。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

誰かがこちらに気がついたようだ。

アレックス

「こんにちは、お嬢さん。今日からこのギルドに入る事になった、アレックス・マーサーだ。」

『アレックス』と呼んでくれ。」

（この子がリサーナかな。まだエドラスには飛ばされてなかったんだな。）

リサーナ

「こんにちは、アレックスさん。」

ミラ

「宜しくな、アレックス。」

簡単に挨拶をしていると、マカロフの横にいたエルザに気がついたある2人は、さっきまで喧嘩をしていたのにビクビクしながら、肩を組んでエルザと話している。

グレイ

「よ、よおエルザ。き、今日も俺達は仲良しだぜえ。な、なあ。」
ガクガク

ナツ

「あ、あい」ガタガタ

エルザ

「うむ、仲良しはいい事だか時には喧嘩して互いの悪い所を見つかるのもいいぞ。」

ナツ&グレイ

「「お、俺達はそんな事（しないぜ。）（するわけねえだろ。）」「（苦笑）×2

エルザとの話が終わると、エルザは奥の部屋に向かって行く。それを確認した2人は、安心してその場にしゃがみ込んだ。

しばらくして、ナツが俺に気づいたらしく『お前誰だ？』、と言っている感じがした。

よく見ると、周りの人が俺に注目している。

マカロフ

「彼はワシらが用のあつた町にいた、腕のあるフリーの魔導士じゃ。名前は『アレックス・マーサー』。」

そう言うのと、ナツは目を輝かせたりグレイは興味を持ったり、ミラに至っては闘志をむき出しにしていた。マカロフは続けて、

マカロフ

「近頃、少し離れた町に現れる猛獣を1人で倒したらしいからの。皆も最近ギルドでの依頼で、この辺りの猛獣の討伐が少なくなったじゃろう？」

「それは、ここにいる彼のおかげなのじゃよ。」

一同

「「「「「えええええええつ?」「」「」「」」」」」

ナツ

「そうなのかじっちゃん! よし、お前。俺と勝負しろっ!」

そういう事を言うと、ナツは笑顔で右の拳を俺に向けて言ってきた。勿論右手には、炎を纏っている状態だ。こいつはかなりのバトルジャンキーらしい。というかマカロフ、余分なところは言うな。

アレックス

「少しは落ち着け。俺とお前は、初対面しよたいめんだろ? そんな人に勝負を挑むのはどうかと思うのだが?」

俺は持てる限りの常識をナツにぶつけて理解してもらいたかったのだが、

ナツ

「いいじゃねえか、ちよつとくらい。早く外に行こうぜ!」

どうやら無駄らしくナツに引っ張られながら表にでた。マカロフも小声で、

マカロフ

「一回でいいんじゃない。軽くでもいいから、やってくれんかのう？」ボソボソ

マカロフが苦虫を潰した顔をしていると、周りからは「マスターが認めるほど強いらしいぞ。」とか「どれ程の実力を持っているんだ？」と、ギャラリーまで増える始末。

……つまり、『闘わないとマズイ状況』という事らしい。

Side Out ギルド内

Side アレックス

マカロフ

「それでは2人共、準備はよいかの？」

ナツ

「早く始めようぜ!!」

審判はマカロフがやるらしい。俺が「手加減してやる。」ってのをナツに持ち掛けたら、「いらねえよそんなもん。」と言われた。

そして、目の前では目をキラキラと輝かせたナツがいる。……
なんでこんなふうにうれしそにできるんだ？

周りはギルドのメンバーに囲まれているので直ぐに降参出来ない。

アレックス

「しかたない……」

そんな事をぼやいてから、俺は観念して能力を使う事にした。直ぐに『覇王色の覇気』で相手を『威圧』してもいいが、それだと芸が無いからやめておこう。

アレックス

「マスター」ボソッ

審判のマカロフヘナツに聞こえない程の小声で話かける。

マカロフ

「ん？ なんじゃ？」ボソッ

アレックス

「ナツにはどの程の力で相手をすればいいでしょう。」ボソボソ
マカロフ

「ふゝむ、適当にやればいいのではないか？ こう、軽いトレーニング的な感じかのう？」

あ、殺すのは勿論の事じゃが、なしじゃぞ」ボソボソ

まともな情報は得られなかった。というよりさっきまで家族って言ってたのに、その家族に対して殺し以外はオツケーなのか？と、俺が驚愕していると、

ナツ

「はやくしろよっ！」

対戦相手であるナツが、苛立っているのがわかる位の声を出してきた。

アレックス

「分かったからちょっと黙ってる。」

俺はMUSCLES^{マッスルマス}を装備した。

ちなみにこの能力は、素手状態の攻撃ダメージを強化。戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

マカロフ

「うんっ？それがお主の能力かのか？」

アレックス

「ええ。相手が相手なので、ある程度本気を出さないと色々面倒でしょう。」

俺は苦笑して答えるが、

アレックス

「でも本当は、手加減するのが苦手なんですよ。」 クスクス
マカロフ

「・・・・・・・・。」

俺の言葉に黙るマカロフ。そのマカロフを尻目に、俺は戦闘体制にはいりナツに話しかける。

アレックス

「ナツ、と言ったな？先に謝っておこう。」

ナツ

「ん？何をだ？」

声をかける俺。ナツは思案顔で首を捻っている。でもこれは先に言っておかなくてはならない。

アレックス

「手加減は、なるべくする。だから・・・・・・・・死ぬなよ？」

その瞬間、俺はARMORED FORMアーマードフォームを装着した。周りから驚嘆の声がする。ナツも驚いてるようだが、俺は気にせずナツに話す。

アレックス

「さあ、始めようか？」

準備は万端。俺が両腕を広げながら話かけると、ナツも俺の声で我にかえたのか構えなおす。

マカロフ

「始めっ!!！」

マカロフの合図とともに、ナツは大きく息を吸い込んでいる。この技は、確か広範囲にいる敵に対して攻撃するはずだ。
ナツは周りに関係無く技を出すらしい。

ナツ

「火竜ウの咆哮オオ!!！」

避けることもできるが、避けたら後ろにいる皆に当る。俺はしよ
うがなく手を前に突き出して、

マカロフ

「っ!!？アレックスッ!!！」

ナツの炎が直撃した。マカロフの慌てた声が聞こえるが、俺は『武装色の覇気』で身体の表面を覆っているから少し温かい位だ。確かに、普通に見たら自殺行為だ。

ナツの技の衝撃で、俺の周りに砂塵が巻き上がった。

ナツ

「よし、俺の勝ちだっ！」 ブイ！

ナツは勝ちを確信しているようだ。周りからも「なんだ、弱いじゃないねえか。」との声が聞こえる。

アレックス

「俺も随分なめられたもんだな……」

ナツ

「なっ!？」

俺がつぶやくと同時に、砂埃が晴れていく。そこには無傷でいる俺がいる。

アレックス

「解析終了……ナツ、お前の炎はもう効かない。いや、俺にはもう意味が無い。」

そして俺は先程よりも強く拳を握りながら、

アレックス

「じゃあ……、次はこっちの番だ……なっ!!」

そう言ったと同時に、ナツの懷に飛び込む。もう反撃の隙は与えない。

ナツ

「っ!？」

ナツがそれに気づき、身構えるがもう遅かった。

ナツ

「うわっ!？」

俺はナツの足払い、身体を宙に浮かせた。そしてナツの左肩を押さえて地面に仰向けにする。

ドゴンッ!

こぶしを叩き付けた。先程よりも多い砂埃が宙に舞い上がる。

エルザ

亀裂の入った地面と共に、3つの穴が見えたからだ・・・

マカロフ

「そこまでっ！ 勝者、アレックス！」

そこに、マカロフの試合終了の合図がかかる。

アレックス

「んっ？」

勝負が終わったのに静かだ。辺りを見渡すと、皆口を空けてこっちをみている。

まさかとは思うが、やりすぎたかな？

俺がそう思っていると、急に周りから、

一同

「「「「「「「うおおー！ー！ー！ー！ー！っ！！！！！！」」」」」」

アレックス

「っ！？」

皆の叫びが響き渡った。

第000. 3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ（後書き）

いかがでしょうか？

今回はここで終わりましたが、次回はグレイ達がアレックスと勝負をします。

〜活動報告内容の途中結果〜

ミラジェーン・・・2票＋1票

第000. 4話 礼儀知らずに容赦なし（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回は、色々な意味で大変でした。

この話から、キャラクターの視点を書き始めましたが、キャラクターの口調がなかなかうまくいきません。
ご意見の方、気軽に書き込んで下さい。

では、どうぞ！

第000. 4話 礼儀知らずに容赦なし

Side アレックス

ギルド内では、先程のナツとの戦いでかなり興奮している4人＋1人がさっきから俺に、『（もう1回）（俺と）（私と）戦え！』と言ってきた。

ちなみに、その人物は先程負けた

ほのう ドラゴンスレイヤー
炎の滅竜魔導士『ナツ』、

こおり そうけい まどうし
氷の造形魔導士『グレイ』、

かみなり ドラゴンスレイヤー
雷の滅竜魔導士『ラクサス』、

ザ・ナイト
騎士を使う『エルザ』、

テイクオーバー
吸収・サタンソウルを使う『ミラ』だ。

アレックス

「条件付きで良いなら相手をする。良いか？」

ナツ

「おう！早く言え！」

グレイ

「ナツ、お前は負けたんだから諦めろ。」

ラクサス

「ガキ共の相手はしないで、俺と戦え！！」

エルザ

「少して良いから手合わせを頼む。」

ミラ

「アレックス早くしろ。」

俺はひとまず、こいつ等に『礼儀』をいち早く叩き込みたい。何^ど処の世界に年上に対してタメ口で話す奴がいるんだ。

エルザを見習って欲しいもんだな。個人的にはミラがタイプなんだが……

アレックス

「まず最初に……ナツ、お前はさっき負けたばかりだから諦めろ。

次に裸の君、せめてズボンを履け。パンツだけはさすがにマズイ。それとヘッドホンの君、お前もまだ『ガキ』の部類だ。調子に乗るなよ？

エルザ、1人を相手にしたら休憩させてくれ。それでもいいなら相手をする。

最後にミラ、一応俺は年上だ。せめて敬語で頼め。それに女の子なんだから、その言葉使いはやめなさい。」

俺は言いたかった事を、全て言った。全員の名前は知っていたがあえて言わない。なんでかって？こいつ等には、一から『礼儀』を叩き込みたいからだよ。

そんな事を言っていると、皆が口々に喋り出した。

ナツ

「次は勝つ！だから勝負だ！」ニッ！

グレイ

「だあーっ！しまった！」バタバタ

ラクサス

「ふざけんじゃねえぞ！」バチバチバチッ

エルザ

「ありがとう、アレックス。」ニコッ

ミラ

「わ、わかった。次からは気をつける。」オドオド

アレックス

「よろしい。ナツとヘッドホンの君は……ちょっと黙ってる。」ギンッ！

俺は、覇王色の覇気をナツとラクサスに気絶させる程度に当てた。ナツはすぐに倒れたが、ラクサスは少し耐えた様だ。だが、こちらも倒れた。

アレックス

「これで礼儀知らずとうるさい奴はいなくなったな……んっ？どうした。」

それを見ていた3人は若干……いや、かなり驚いている。周りにいた人達も「何をしたんだ。」や「ラクサスは負けたのか？」と言っている。

そんな中、1人の人物が口を開いた。

マカロフ

「それはワシ等にしたのや、猛獣を倒したのと同じ『威^い圧^{あつ}』なのか、アレックス？」

アレックス

「……はい、しかしマスター達にしたのは1割だとすると、2人を気絶させたり猛獣にしたのは2割程の威圧ですので、ご心配なく。」ニコッ

「さあ、話とはぶが俺は暇だが、時間が無い。誰から始めるか決めてくれ。決めてないなら上着を着てない君から始めよう。」

グレイ

「お、おう。よろしく頼むぜ。」

そして俺らは、ナツとラクサスを残して、表へと向かう。

勝負の順番は、

1. グレイ・フルバスター
2. エルザ・スカーレット
3. ミラジェーン・ストラウス

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

（ラクサスが一瞬でやられちゃった……勝てるのかな？）

エルザ

（なんだかミラの顔が赤くなってるな……まさかな。それよりもどうやって、アレックスを倒すかだな。）

ミラ

（何をしゃがったんだこいつは？急にナツとラクサスを気絶させやがった。しかも、“礼儀が知らないから”って理由でだと？）

（だいぶ本気でかからないとまずいな・・・あれっ？そういえば、アレックスと始めて会った時ってタメ口だったよな・・・なんで怒らなかったんだ？）

（それに、久し振りに“女の子なんだから”、だなんて言われた

／／／

それぞれが色々な事を考えている。

＼Side Out 3人

＼Side アレックス

アレックス

「準備はいいか、グレイ。時間が欲しいなら幾らでもやるぞ。まあ、あげるつもりは無いけどな。」

グレイ

「じゃあ聞くなよ！期待しちまったじゃねえか！」

そんな事をしていると、マカロフが審判をやりだした。何だかんだいって、俺もマカロフも割と楽しんでいる。

そしていつもの事だが、ギルド内にいたほぼ全員がギャラリーと

して集まってきた。

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「氷造形・アイスメイク槍騎兵！ランス氷造形・アイスメイク大槌兵！ハンマー」

マカロフの合図と共に、グレイはランス槍騎兵とハンマー大槌兵を繰り出した。
おそらくだが、ランス槍騎兵でその場に足止めさせているうちに、ハンマー大槌兵
で俺にとどめを刺すつもりだろう。
しかし、実際には自分の得意な技をアレックスに1回でもいいか
ら当てたいだけらしい。

アレックス

「氷の槍とハンマーか・・・組み合わせは素晴らしい・・・だ
が、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「ブレイズBLADES & シールドSHIELD！」

「Side Out アレックス

」Side グレイ

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「氷造形……アイスメイク槍騎兵！ランス氷造形……アイスメイク大槌兵！ハンマー」

グレイは、この攻撃を最も得意としている。ランス槍騎兵はかなりのスピードがある為、先制攻撃に向いている。ハンマー大槌兵に至っては、先程ランスの槍騎兵よりはスピードは劣るが、威力は申し分ない為追撃として出した。

グレイ

（決まった！）

アレックス

「だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「ブレイズBLADES&シールドSHIELD！」

Side Out グレイ

Side アレックス

ギルドの中で倒れていたラクサスが目を覚ました。

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

（何にも見えなかった・・・気づいたら横にいて、喉に突きつけられてた。）

エルザ

（やはり強いな。今回は諦めて、ミラと変わってもらおうとするか。

）「ミラ、順番が変わってくれないか。私は辞退するから、頼む。」

ボソボソ

ミラ

「はあっ?・・・こ、今回だからな!／／」ボソボソ

エルザ

「すまない、恩にきる。」ボソツ

（やはり顔が赤いな・・・もしかして・・・な?）

ミラ

（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!何だか、ドキドキしてきた!!なんで!?落ち着け私、たかが勝負するだけだろ!?）

カーアツ

それぞれが特集な思いをしたりしている。

Side Out 3人

Side アレックス

アレックス

「なかなか面白い技の組み合わせだったぞ、グレイ。だがやるなら槍騎兵をもっと早く打ち出して敵を攪乱させてから、大槌兵を相手から見えない位置から当てる事だ。」

「まあ弱い相手とか不意打ちなら、かなり強力なコンボだ。俺でもギリギリで反応できたから、危なかったよ。」

グレイ

「そ、そうなのか。（あの動きは絶対に、強い奴の動きだった。一つ一つに無駄がなかったからな。）」

アレックス

「ああ、後は攻撃後の動きに気をつけろ。どんなに強い技で『結果』が良くても、技を出すまでの『過程』も大事だからな。」

俺はグレイに簡単なアドバイスをしていると、エルザが俺に近づいて“今回は辞めておく”と言った。つまり次に勝負するのはミラだ。

………なんだか物凄く顔が赤いが、気のせいだろうか。

アレックス

「ミラ、始められるか？それともお前も、エルザみたいに辞めておくか？顔がだいぶ赤いが。」

ミラ

「だっ、大丈夫だっ！／＼／＼」

マカロフ

「ふっ。・・・では両者準備は良いかの？」

アレックス&ミラ

「「ああ、いいぞ」」

マカロフ

「それでは、始め！」

マカロフの合図と共に、俺は走りながらマッスルマスMUSCLE MASSを装着した。ミラも、サタンソウルになり両者の『殴り合い』が始まる。

『殴り合い』は始めてだから、見聞色の覇気を使ってミラの攻撃を『探知』し始めたら、ミラの後ろからさつきまで倒れていたラクスが、らいりゅうほうてんげき雷竜奉天劇を繰り出した。

流石にマズイと思い、俺は一旦ミラの右拳を顔の左に受け流し、ミラを左手俺の懷に引き寄せる。そしてミラの後ろから来た攻撃に対して、右腕をSHIELDシールドにして反射を使った。

反射だけでも良かったが、反射だけで確実に返せるか分からなかったから、保険として出した。

アクセラレータ一方通行さんの反射能力、久しぶりに使ったような気がする。

アレックス

「解析終了・・・これで万が一でも安心だな。ミラ、大丈夫か？」

ミラ

「＼／▽／＼」プシューッ
アレックス

「気絶してる……のかこれは。なんだか幸せそうだが。」

＼Side Out アレックス

＼Side ミラ

マカロフ

「それでは、始め！」

私は闇雲に拳をアレックスに突きつけた筈だったが、アレックスはそれを簡単に避けて、私を抱き寄せた。

ミラ

（えっ？なに？アレックスに抱き締められてる？えっ？どうゆうこと？って言うか私アレックスの首に腕まわしてる？）

（うわっ？アレックスの息が首につ？ヤバイヤバイヤバイッ？顔が？アレックスッ？力を込めるな？アレックスの胸に顔が？くあw
se drift gyふじこlp？）

（しあわせだー！！！！＼／▽／＼）プシュー

Side Out ヲ

第000. 4話 礼儀知らずに容赦なし（後書き）

いかがでしょう？

頑張って続きを書いていきたいですが、軽いスランプです。（

ん、y1・～

でも、諦めません。

次回は、ラクサスへのお仕置き編です。
では、また会う日まで。

b y天翔る堕天使より。

第000. 5話 一方的な勝負（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

何とか書けたけど、あまりの駄文にスランプ気味な俺（；、
、）
D

原作まで後少しなのでテンション上げて頑張ります。

♪ — O (≡▽≡) O — ♪

では、どうぞ！

第000. 5話 一方的な勝負

Side アレックス

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういうつもりなのかな？」ギロリッ！

ラクサス

「ーッ？」ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」ゾクッ！

俺は急に攻撃してきたラクサスに対して『その場から動くな！』の意味を込めた威圧をしてから、マカロフには『皆を近づけるな』の意味を込めた威圧をしたのは、この方が早く伝わるからだ。

2人は理解したか判らないが、ラクサスはその場から動かずにこっちを見ている。マカロフも察してくれたのか、俺に向かって1度頷き俺とラクサスから、皆を離れさせた。

そんな中、ある2人にマカロフが俺に指を差しながら話していると、2人が駆け足で向かってきた。エルフマンとリサーナだった。恐らくマカロフが頼んだのだろう。

エルフマン

「姉ちゃん！アレックスさん、姉ちゃんは大丈夫ですか！？」

リサーナ

「エルフ兄ちゃん、アレックスさんが守ってくれてたから大丈夫

だよ。」

アレックス

「ああ、大丈夫だ気絶してるだけなんだが・・・やけに顔が赤いんだ。勝負の前からだったから、もしかしたら風邪なのかもしれない。看病は手伝うから、後は任せてもいいか？」

エルフマン

「はっ、はい！！」（凄く赤い！早く寝かさなきゃ！！）

リサーナ

「わかりました。」（気絶してる割になんだが顔がニヤついているんだよな。）

ミラ

「（／／▽／／）」プシュー

俺は気絶してるミラをエルフマンに任して、リサーナにはすっかり忘れていた『特殊アイテム』を1粒渡して、起きたら飲むように伝えた。

そして俺は怒りが爆発寸前だったが、今を見て反省していれば少し能力を抑えてやろう。と、いった願いを思いながらラクサスにむかって、

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴ！！

Side Out アレックス

Side ラクサス

俺は確かに攻撃したはずだった。俺の技でもかなり強力な、らいりゅう雷竜うほうてんげき奉天劇を繰り出してミラと一緒に倒してやったはずだ。
それなのにあいつは簡単に防いだけでなくて、らいりゅううほうてんげき雷竜奉天劇を俺にそのまま返しやがった。

ラクサス

「どうゆう事だ。」

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういうつもりなのかな？」ギ

ロリッ！

ラクサス

「ーッ？」ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」ゾクッ！

あいつは今、何をしやがった？俺が勝負を挑んで気絶した時よりも、かなりヤバイ感じがしやがる。『少しでも動けば貴様の命が無いと思え。』とでも言ってるのか？

だが、俺は最強だ！さっきはきつと、まぐれに決まっているはずだ。そうに決まっている！俺に勝てる奴は、このギルドにはいないんだからな。

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴゴ！！

Side Out ラクサス

Side アレックス

アレックス

（マカロフが周りの人を遠ざけてくれて助かった……これで心置きなく能力が使える。）

「ヘッドホン君、自己紹介でもしようではないか。俺の名前は、『アレックス・マーサー』。好きに呼んでくれ。君の名前は？」ラクサス

「黙ってろ、化物！自己紹介？そんなもん、どうだっていい！このギルドで最強の俺と戦え！」アレックス

「……成る程、『原型が留めなくなるまでこの俺を叩いてくれ。』だな、任せておけラクサス。それと俺の異名は『化物』モンスターだから、褒め言葉ありがとう。」

俺はラクサスの言葉を自動変換、もしくは自己解釈をした俺は手加減する気はもう微塵も無い。

俺はMUSCLE MASSマッスルマッスを装着して、武装色の覇気をMAXま

で身に纏わせて構える。

アーマードフォーム

ARMORED FORMも個人的に好きだから装着して、黒い羽も出すがこれは自分の腕に巻き付く感じで纏わせる。

こっちの世界に来て興味本位でやってみたら、時間は掛かったが上手くできた。時間としては30分間使用ができる。回数は20回程だが時々増減する。

アレックス

「実は俺も最凶さいきょうだから気が合うな。」ニヤリ

ラクサス

「これでも喰らっとけ！鳴り響くは招雷の轟き、天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」バリバリバリッ！

空中から巨大な雷が俺の頭上目掛けて降ってきた。しかし俺はそれを避けて右拳で打ち消した。

実際は先程の攻撃で演算をしていたから、ラクサスの雷を空気中に小さく分散させているだけであり、そんな強く殴ってはいない。

アレックス

「それで？何故いきなりミラに攻撃したんだ。運が悪ければ死んでしまっていたかもしれないぞ。」

ラクサス

「うるせえ！大体お前が俺の事を『ガキ』扱いしたからだろ！それにあいつは弱い！なら死んでもかまわん！ハアーーッ！」

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。そん

なラクサスを俺は右拳で鳩尾を殴った。

ラクサス

「がはっ!？」

突っ込んできたラクサスはその場で倒れそうになるが、俺は襟を掴んで無理矢理立たせる。苦しそうだが構わない。

そのまま俺はアッパーカットをラクサスにかましてからSPスバIKイクドライブEDRIVERをやった。これは両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける技。アッパーカットの後に浮かんでいる敵にしか使えない。

そして地面に叩きつけて倒れているラクサスにGROUNDグラウンドSHATTERドスターもかました。これは、地面を思いっきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす技。

アレックス

「これで、フィニッシュだ。FLYINGフライングKICK!キック&FLIPフリップKICKランチャーLANCHER!」

FLYINGフライングKICKキックは、ジャンプしてから相手に右足で蹴る技。FLIPフリップKICKランチャーLANCHERはFlyingフライングKickキックがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げること、追加ダメージを与え軽量の相手を吹き飛ばす。

ラクサス

「がはあああ！」ズザーーーーーッ！」

ラクサスは、マカロフの近くまで蹴り飛ばされ気絶している。それをみたマカロフ、はラクサスに近づき頷いた。

マカロフ

「うむ。ここまで！勝者、アレックス！」

マスターが左手を挙げ勝利者宣言をすると同時に周りからは、

マカオ

「すげえぞ！あのラクサスを一方的に倒しやがった！」

ワカバ

「嘘だろ！？あのラクサスが新人に負けたのかよ！？」

ナツ

「アレックス、もう1回俺と勝負しろー！」

マカオ&ワカバ

「やめとけナツ、あのラクサスでさえ負けたんだ。しかもお前は負けたばかりだろ？」

ナツ

「やってみなきゃわかんねーだろー！なあ、ハッピー？ハッピー」

「あいっ！」

周りが少しずつだが騒がしくなってきた。恐らくだが、これが普

段のフェアリーテイルだろう。だから仕方が無いんだろうな。そう思っていると、息を荒げながらゆっくり立ち上がるラクサス。

ラクサス

「はあはあ・・・次、戦うときは必ず勝つ！はあはあ・・・覚えておけ！俺が最強だ！」ヨロヨロ

アレックス

「構わん。俺はいつでも挑戦を受ける。だが今はこれを噛み砕いて傷を治しとけ。直ぐに治るはずだ。」つ薬

ラクサス

「クソったれが！」パシッ！ガリッ！

薬のおかげか、立ちあがるのが大変そうなラクサスだったが、直ぐに立ち上がる事ができたラクサスは、ギルドの中へゆっくり入っていた。

アレックス

「ラクサス、この世界には死んでもいい奴なんていない。ミラもその1人だ。」

ラクサス

「ふんっ。お前は先生か。」

俺は肩を貸しながらラクサスを仮眠室へ運んで寝かせた。ミラは別の部屋で寝ているらしい。顔を出そうとしたが、俺は他のギルドメンバーに背中を押されながら、ギルドの方に言ってしまった。

エルフマンとリサーナがいたので話聞くと、どうやら俺の渡した

薬を飲んだらまた赤くなって寝たと言っていたが、熱は無かったみたいだ。この楽しい宴会が終わり次第、顔を出そうと思っている

Side Out アレックス

第000. 5話 一方的な勝負（後書き）

いかがでしょう？

次回はミラにお見舞いに行く話です。なかなか上手く出来ないの
で、時間は掛かります。

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563z/>

FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーオブモンスター》～

2011年12月24日00時58分発行